



## 2024盆「精霊蜻蛉」 ——みんつど号外

(りりりーん、りりりーん…浄土黒電話)

「はい、『あの世とこの世を結ぶ』周南とんぼ交通です」  
「もしもし、わしら天地の先祖じゃが、下界まで今年の盆も一族で今日行くからタクシー頼む」

「『古墳セミアーバン・天神の里』の天地さまですね。申し訳ありませんが、毎年手配させていただいております、『オニヤンマ号』がですねー、周辺開発の影響で台数が激減しております。手狭ではありますが『シオカラ号』)でご勘弁ください」

「しょーがねーなー。じゃ手っ取り早く頼む。こちとら炭鉱・田川の出だ。待たすんじゃねえぞ！」

「かしこまりました」

2024年8月9日

天地家の次男・成行は、9時半に来られるはずの寺のお坊さんを出迎えに庭に出ていた。30分を過ぎてもこられない。交通渋滞かな？ と思い、サンダルで庭のトマト、チョウチンカズラをみていた。すると、一匹のシオカラトンボが目の前を通り過ぎ、玄関の前で止まった。

「おー、ついたついた。かあちゃん、金払っとけ。ほれ、渋沢栄一のピン札もってるだろー？ おーい、みんな着いた、のりこむどー」

(ヨイシヨイシヨ、どかどかどか)

(シオカラトンボ号から下車し、家の中へ乗り込む天地家ご先祖)

「遅れました！」ものの一分ほどで、お坊さんの軽自動車到着、お経がはじまる。心地よい響きに酔いしれる一同。終了後に若いお坊さんは、野犬の話でひっぱる。成行は、祖先の方が退屈されてはいけないだろうと、お墓におはぎなど食べものを置いていくというのはどうかという話題を持ち出す。すると、宗派が違うといろいろあるが……と話し始め、流れで、母が自分たちの葬式の話題を持ち出し、30分以上して帰って行った。

「あんたがおらんかったら五分で終わっちゃったわ」母は笑う。父もにこにこしている。一カ月前からきょうのことを考えていたし、今日も一時間以上前から何もしないのにおちつかなかった。

我が家の血筋はせつかちなので、すでにそれぞれのご先祖は自分が一番話したい、過ごしたい部屋へ。父の部屋で横たわるもの、母の三畳間にいるもの、兄の部屋で大リーグを観るもの、姉の部屋で遊ぶもの、成行の部屋で自称「国宝級」エロDVDコレクションを鼻の下を長くして眺めるもの……それぞれにこのお盆休みの下界を楽しむ始めた。

「くうん、くうん」

「ごめん、ナナちゃん。もちろんキミも待っていたよ」(天地家一同)。

